

令和六年

二月十八日

(日)

～二月二十四日

(土)

十二時～十六時 入場無料

質屋の記録

～見えてくる昭和初期の暮らし～

会場

旧伊勢屋質店 東京都文京区 本郷五丁目九番四号

企画

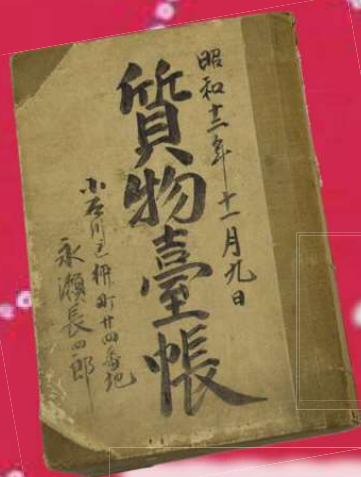
跡見「学芸員」 in 菊坂

主催

跡見学園女子大学地域交流センター

協力

神奈川大学歴史民俗学科 教員・学生有志



成果企画展

質屋の記録

～見えてくる昭和初期の暮らし～

「質屋＝お金に困っている人がお金を借りにくる場所」
質屋にそんな印象を持つ人は多くないでしょうか。

文京区本郷菊坂に現存する旧伊勢屋質店。ここは万延元(1860)年に創業し、昭和57(1982)年に廃業した質屋でした。旧伊勢屋質店は菊坂の本店の他に柳町支店という支店を構えていました。

『質物台帳』とは質屋に来た客が預けたものが書いてある帳簿です。旧伊勢屋質店には柳町支店の戦前から戦後にかけての台帳が未だに残されています。今回、跡見「学芸員」in菊坂のメンバーと神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科の学生らが「台帳プロジェクト」を立ち上げ、この質物台帳の翻刻と分析を行い、成果企画展を開催するに至りました。

当時の人々にとって質屋とはどのような場所であったのか。最も多く質入れされていたものは何か。多く質入れされていた着物はどのような色だったのか。質物台帳の記録を読み解いていくと、当時の人々にとって質屋は身近な「庶民の金融機関」であったことがわかります。企画展へ足を運び、質屋とはどんな場所であったかを展示を見て考えてみませんか？

昭和12年ごろの街の雰囲気や人々の生活の息吹を味わえる企画展となっております。ぜひご来場ください。

会期中は、2023年度文の京インタープリター養成講座成果パネル展も同時開催します。受講生による文京区に関連する歴史や文化についての研究成果を展示します。ぜひ合わせてご覧ください。



2024年2月18日(日)～2月24日(土)

時間:12時～16時(入場は15時30分まで) 入場:無料

会場:旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)

東京都文京区本郷5丁目9番4号

企画:跡見「学芸員」in菊坂

協力:神奈川大学歴史民俗学科教員・学生有志

問合せ:跡見学園女子大学地域交流センター

03-3941-7420



* 跡見「学芸員」in菊坂は、跡見学園女子大学の学生たちで結成したグループです。旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)を拠点として活動しています。

* この成果企画展は、生涯学習開発財団の研究助成を受けて実施されたものです。

【アクセス】※駐車場はありません。公共交通機関でご来場ください。
都営大江戸線・三田線「春日駅」より徒歩約5分
東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目駅」より徒歩約7分
Bぐるバス⑦「文京小石川クリニック(三田線春日駅)」より徒歩約5分

質屋とはなんだろう？

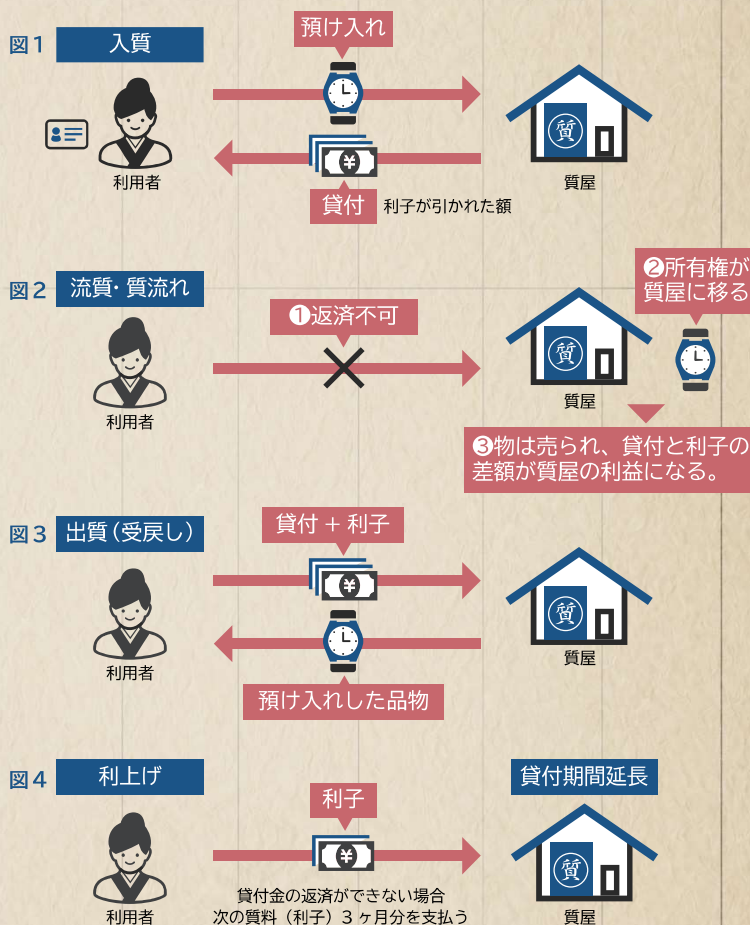


皆さんは、質屋をご存知でしょうか？もっぱら物品「質物（しちもつ）」を担保として金銭貸付を行う業者である質屋は、歴史的に庶民の生活に寄り添ってきた存在であり、身近な金融機関の代表でもありました。

物品を担保に金銭貸付を行う業者の出現は鎌倉中期からであり、当初は「庫倉（くら）」とよばれ、室町期になると、「土倉（どそう）」、「土蔵」とよばれ、近世に入ると「質屋」の名称が一般化します。そして、京都-大坂-江戸をはじめとして、各地で城下町が発展するのに伴い、質屋はおもに都市下層民の生活資金調達融資の方途としての役割を担ったとされています。

質屋の仕組み

質屋では、物品を担保に融資（貸付）を得ることができます。その際、利子が引かれた額が貸付られます（図1参照）。担保には衣類、装身具、家具など身近の生活用具が多かったといわれています。そのため質屋は、容易で手早く利用できる金融機関として活用されるようになります。貸付られたお金を返済できない場合、質屋は預かっていた物品を売却します。これが預けていたものが取り出せなくなる「流質・質流れ」です。流質までの期限は、3ヶ月や6ヶ月など地域によって異なっていました（図2参照）。もちろん、預けた物品は、利息と元金を払えば取り戻すことが可能です（図3参照）。



「質屋の仕組み」で説明したように、質屋では、期限内に返済ができない場合、預けた物品を売却します。そして、この流質までの期限は、次第に短縮されるようになります。特に規模の小さな零細質屋では、資金の回転を早め収益を高め、さらに競争に勝つために、物品の鑑定価格に対する貸付を無理に高めようとしていました。また、物品の流質率は所得の高低、景気の変動にも影響されます。不況期には、利子返済が困難となるため流質率が増大し、逆に好況期には減少する傾向がありました。

1925（大正14）年に当時の大蔵省が東京都内の質屋を調査したところ、質屋の収益の内90.6%が利子によるもので、残りの9.4%を流質物売却による利益であり、ほとんどが利子による収益であったことがわかっています。

参考文献
・竹内利美、石野典、1994、「質屋」『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館 (<https://japanknowledge.com> 2023年10月8日参照)
・渋谷隆一、鈴木亀二、石山昭次郎、1982、「日本の質屋」早稲田大学出版部
・跡見学園女子大学地域交流センター、2021、「旧伊勢屋質店」跡見学園女子大学地域交流センター

伊勢屋質店柳町支店の利用者はどこから？

1937年(昭和12)年11月9日～1938(昭和13)年1月16日

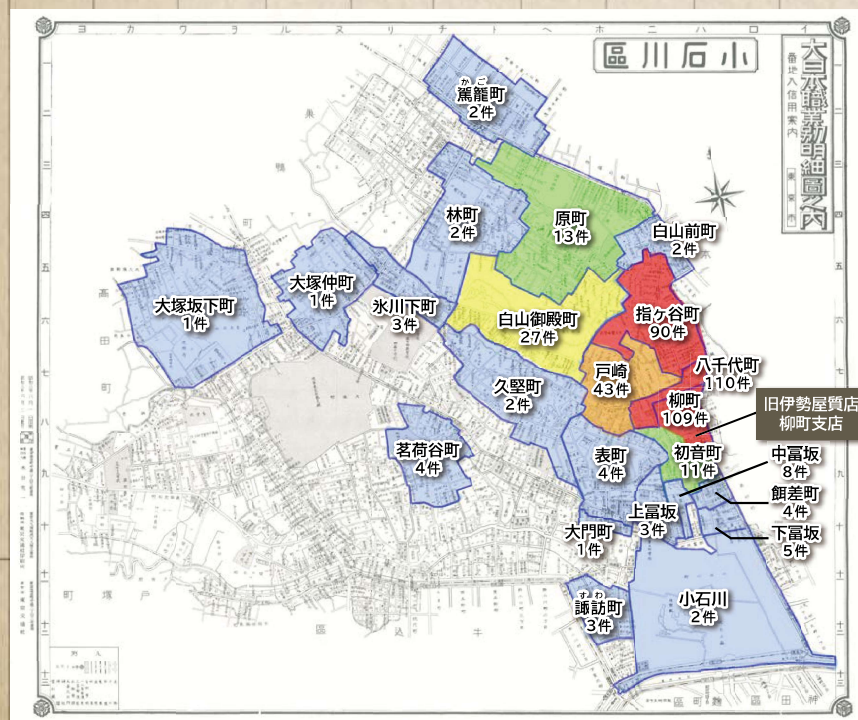
小石川にあった伊勢屋質店柳町支店の利用者の多くは現在の文京区エリア(旧小石川区および本郷区)に住む人々でした。

特に利用者が多かったのは、柳町やその周辺の八千代町、指ヶ谷町、丸山福山町など、柳町支店周辺の地域でした。

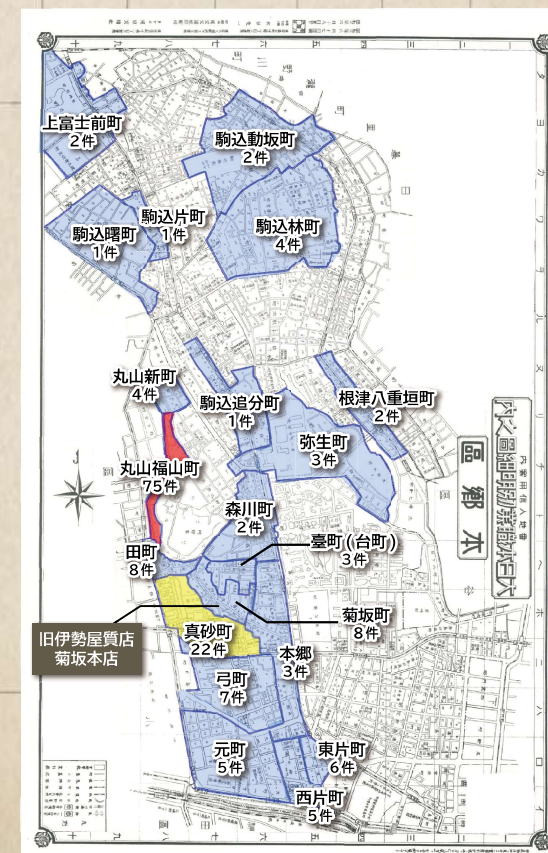
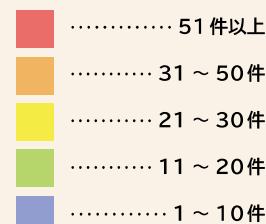


本郷区(総計169件・本郷区内不明5件)

小石川区(総計458件・小石川区不明9件)



色別の利用件数



参考文献

- ・1928年、地域資料編纂会、『大日本職業別明細図小石川区(昭和3年)昭和前期日本商工地図集』
- ・1928年、地域資料編纂会、『大日本職業別明細図本郷区(昭和3年)昭和前期日本商工地図集』

伊勢屋質店柳町支店の 利用者はどこから？



1937年(昭和12)年11月9日～1938(昭和13)年1月16日

伊勢屋質店柳町支店の利用者は、現在の文京区エリア(旧本郷区および小石川区)の在住者が624件と最も多く、全体の約66%の割合を占めていますが、その他にも73件の他地域からの利用者が確認できました。このように文京区エリア外から訪れた人々にはどのような事情があったのでしょうか。文京区で仕事中にお金が足りなくなったのか、それとも柳町支店を利用するために訪れたのでしょうか。

地域別の利用件数 文京区エリア外からの利用者の地域と利用件数

地域	件数
文京区エリア(旧本郷区および小石川区)内	624件
文京区エリア(旧本郷区および小石川区)外	73件
不明	60件
無記載	184件
総計	941件

地域	件数
牛込区(新宿区)	12件
神田区(千代田区)	5件
四谷区(新宿区)	3件
深川区(江東区)	1件
麹町区(千代田区)	1件
王子区(北区)	8件
豊島区	5件
板橋区	2件
浅草区(台東区)	1件
麻布区(港区)	1件

注：()内は現地域名

地域	件数
芝区(港区)	7件
京橋区(中央区)	4件
片瀬町(神奈川県藤沢市)	2件
渋谷区	1件
鎌倉町(神奈川県鎌倉市)	1件
赤坂区(港区)	6件
本所区(墨田区)	4件
荒川区	1件
葛飾区	1件
川崎市	1件
総計	73件

伊勢屋質店柳町支店を利用した著名人

伊勢屋質店柳町支店には名のある著名人も来店していました。どんな人が来ていたのでしょうか。ここでご紹介します。

阿蘇 惟紀(あそ これただ) 1887(明治20)年11月5日～1941(昭和16)年8月6日

阿蘇神社宮司阿蘇惟孝の長男として生まれる。戦前、阿蘇家は男爵として華族に列せられていた。学習院を経て京都帝国大学を卒業。卒業後、京都市の吉田神社や梅宮神社の宮司を務めた。1934(昭和9)年には廃嫡となり息子と共に上京し、下谷区の学校の講師をして暮らした。1941(昭和16)年、脳溢血で死去。

今回の調査により、1937(昭和12)年11月9日から1938(昭和13)年1月16日の期間に伊勢屋質店柳町支店を4回利用し、コートや女性用の着物を質入れしていたことがわかった。

佐竹 義文(さたけ よしふみ) 1876(明治9)年11月4日～1952(昭和27)年12月28日

東京市四谷区四谷舟町(現新宿区舟町)出身。福井、岡山、山梨、鹿児島、奈良、滋賀、福岡県事務官、同警察部長、同内務部長を歴任。鳥取、香川、和歌山、愛媛、熊本では県知事を歴任した。

今回の調査により、1937(昭和12)年11月9日から1938(昭和13)年1月16日の期間に伊勢屋質店柳町支店を2回利用し、着物や腕時計を質入れしていたことがわかった。

参考文献

- ・歴代知事編纂会編、1991、『新編日本の歴代知事』歴代知事編纂会
- ・泰郁彦編、2001、『日本官僚制総合事典：1868-2000』東京大学出版会
- ・柏木亨介、2021、『戦後社会における旧華族神職家の継承—阿蘇神社宮司三代の事例—』『日本民俗学』307

どんなものが 質入れされていた？

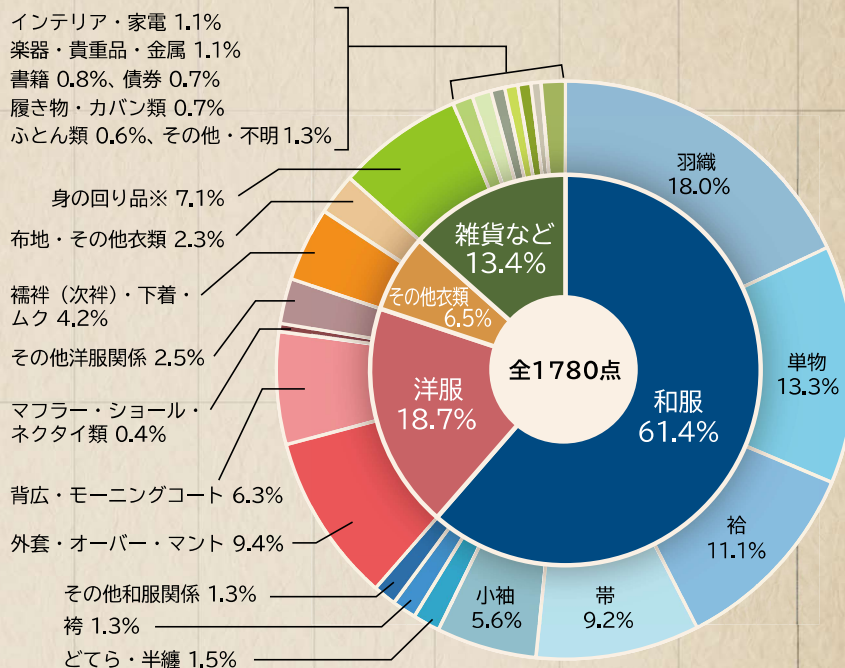


今回は、1937（昭和12）年11月9日から1938（昭和13）年1月16日の期間に伊勢屋質店柳町支店で使用された『質物台帳』を分析しました。約2ヶ月の間に質屋利用件数は941件、担保として質入れされた物の数は合計1780点です。

質入れ品の内訳を分析したところ着物関係が61%（1093点）と取り分け多く、羽織、単物、袷、帯などがあります。次に洋服が19%（333点）、その他衣類が6%（115点）と続き、全体的に衣類が担保として質入れされているのが目立ちました。衣類以外に質入れされていたものは、腕時計、指輪、めがねなどを含む身の回り品や家電、楽器、書籍などの雑貨があります。

貸金の金額を分析すると半数以上が20 銭から5 円未満であることが分かりました。特に、2 円が100件、3円が99件と多いことが判明しました。中には、高価なものを質入れすることもあり、今回最も高価なものは500円の腕時計でした。当時の物価（右下表）をみると、およその貸金金額の価値が分かります。

質入れ品の内訳



貸金の金額ごとの件数

貸金の金額	件数	貸金の金額	件数	貸金の金額	件数
0円20銭	2	5円00銭	84	20円00銭	16
0円25銭	1	5円50銭	4	21円00銭	2
0円30銭	3	5円56銭	1	22円00銭	4
0円50銭	17	6円00銭	49	25円00銭	8
0円60銭	1	6円50銭	4	30円00銭	13
0円70銭	7	7円00銭	34	31円00銭	1
0円80銭	2	7円50銭	3	33円00銭	1
1円00銭	60	8円00銭	44	37円00銭	1
1円20銭	2	8円50銭	3	40円00銭	5
1円50銭	58	9円00銭	10	47円00銭	2
1円70銭	2	9円50銭	1	50円00銭	5
2円00銭	100	10円00銭	45	60円00銭	3
2円10銭	1	11円00銭	11	70円00銭	2
2円20銭	1	12円00銭	22	80円00銭	1
2円50銭	52	13円00銭	9	85円00銭	1
2円80銭	1	14円00銭	4	100円00銭	1
3円00銭	99	15円00銭	31	150円00銭	1
3円20銭	2	16円00銭	4	300円00銭	1
3円50銭	22	17円00銭	5	500円00銭	1
4円00銭	57	18円00銭	4	合計	941
4円50銭	9	19円00銭	1		

貸金の金額の価値

1936(昭和11)年～1938(昭和13)年の物価	
マッチ	12銭
週刊誌	15銭
コーヒー1杯	15銭
ガソリン(1ℓ当たり)	15銭
たまねぎ1kg	20銭
タクシー料金(2人)	30銭
ビール(大びん1本)	37銭
牛肉(100g当たり)	41銭
レコード	1円65銭
学生服(中・高生用)	2円
グローブ	4円30銭
ランドセル	5円
航空旅客運賃(東京～大阪間)	25円
背広注文服	45円
公務員の初任給	75円
和文タイプライター	240円
ダイヤモンド(0.5カラット)	500円
乗用車(ダットサン17型)	2450円

参考文献
・週刊朝日編、1988、『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社
・東洋経済新報社、1954、『戦前物価総覧』東洋経済新報社

着物から読み取る 文京の景色



今回翻刻を行った1937(昭和12)年から1938(昭和13)年の『質物台帳』に登場する質入品の6割は着物でした。ここではこの時代の着物に焦点を当て、柄、色、生地などについて展示説明していきます。3つのパネルを通して、当時の流行や民衆の好みを知ることができます。また、こうした流行や好みを知ることによって当時の文京のまちの生活や景色を想像することができるようになります。

昭和初期の着物の特徴

昭和初期は、まだ着物が日常着でした。この時代は着物文化の「黄金期」(明治、大正、昭和初期)と呼ばれています。当時の着物は、現代の着物と異なり、昭和初期の着物はサイズが全体的に小さく、袖丈が長く、共衿が短いのが特徴です。また、大胆な配色と鮮やかな色彩も当時の着物の特徴です。

和と洋の文化が交わった着物スタイル

明治、大正、昭和初期ではそれぞれの時代で着物は変化しました。明治に洋装が登場するも、まだ一般的には着物が普段着でしたが、明治は文明開化で西洋の文化に影響を受け外套(コート)、吾妻コート(女性用コート)、ショールといった着物と合わせる洋装アイテムが生まれました。大正に入っても、女性は着物が中心でしたが、竹久夢二の描く「大正ロマン」のような女性像が人気を集め、淡い紫や儂い色が流行しました。また、当時ヨーロッパで盛行したアールデコ模様が着物に取り入れられるなど新しいスタイルが生まれました。

伊勢屋質店柳町支店の『質物台帳』の特徴

伊勢屋質店柳町支店の『質物台帳』を読み進めていくと、物品を記入する際に名称が略されることが多いということが分かりました。例えば、吾妻コートは「東コート」、銘仙は「名仙」と書かれています。物品の記入を簡潔にしたかったのかも知れません。

また、襦袢は「次伴」と書かれています。これは当時の東京の人々の発音に近い表記だったのでしょいか。

参考文献

・城一夫、渡辺直樹、2007、『日本のファッションー明治・大正・昭和・平成ー』青幻舎
・増田美子監修、難波知子、2018、『日本の服装の歴史』③明治時代～現代、ゆまに書房
・増田美子編、2010、『日本衣服史』吉川弘文館

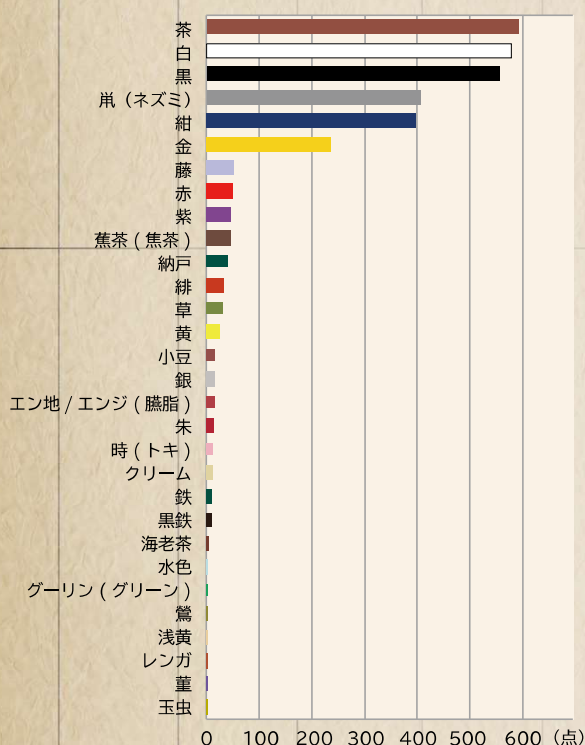
1937(昭和12)年頃の衣類はどんな色？



『質物台帳』の記録には当時の衣類がどのような色であったのかが記されています。そこからは、当時の人々が身にまとった色や街中がどのような色であったのかなどを想像することができるのではないのでしょうか。

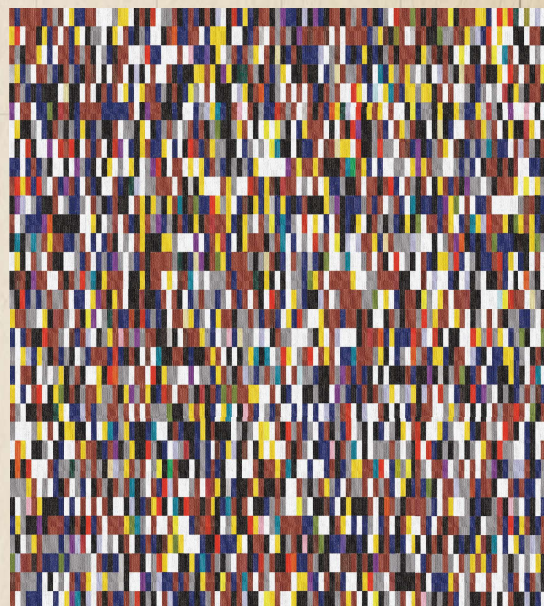
1937(昭和12)年～1938(昭和13)年に質入れされた衣類の色と数

『質物台帳』に登場した1541点の衣類には、3206カ所の色に関する記載がありました。

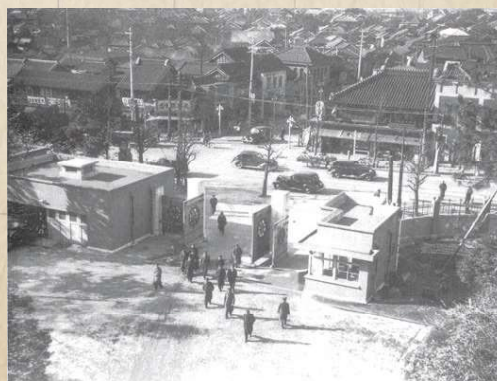


街中の色？

『質物台帳』に登場した30色を出現頻度に合わせて使ったモザイクです。1932年は、日中戦争が勃発し、国民精神総動員運動がスタートし日常生活や消費にも制限や影響が出始める時期です。このモザイクからは何が感じられるでしょうか。



『質物台帳』と同時代の文の京



(右) 駒込追分 昭和13 (1938) 年ごろ 東京帝国大学農学部正門上より
(左) 白山銀座通り (白山下) 小澤乾物店の新装開店 昭和12 (1937) 年

参考文献
・石田結実監修、2020、『くらしを彩る日本の伝統色事典』マイナビ出版
・濱田信義、2011、『日本の伝統色』パイインターナショナル
・文京区、2017、『写真で綴る「文の京」』文京区

1937 (昭和12) 年ごろに 流行った柄は？



『質物台帳』には当時の着物の柄についても記されています。ここでは台帳に記されていた着物の柄の中から、特に多く登場する柄をピックアップしてご紹介します。

『質物台帳』に登場する代表的な着物の柄



縞(立縞)



七宝



蝶



桔梗



菊



椿

柄	特 徴
縞(立縞)	線の大きさや数、間隔などによって多くのバリエーションがある。
七宝	同じ多きさの円を、円周の4分の1ずつ重ねていく文様。
蝶	青虫から成虫に姿を変えるため、天に昇る生き物として吉祥と捉えられている。
桔梗	古くから和歌や絵画、衣装のモチーフとして愛好されている柄。
菊	長寿を象徴する代表的な植物。秋の花として愛でられるようになった。
椿	春の到来を告げる聖なる木として親しまれている。

(出典：藤井健三、2021、『格と季節がひと目でわかるきもの文様』世界文化社から「縞(立縞)」は180頁、「七宝」は186頁、「蝶」は121頁、「桔梗」は47頁、「菊」は54頁、「椿」は66頁より引用)

参考文献

・藤井健三、2021、『格と季節がひと目でわかるきもの文様』世界文化社

戦前の衣類ってどんな生地？



『質物台帳』が作成された1937（昭和12）年頃、流通していた衣類に使用されていた生地はどのようなものだったのでしょうか。『質物台帳』に記載のあった質入れ品の衣類の中から、代表的なものをピックアップしてご紹介します。

着物に使用された生地

名称 （『質物台帳』の表記名称）	説 明
銘仙 （名仙）	熨斗（のし）糸（いと）・玉糸・絹諸撚（もろより）または紡績絹糸で織った絹織物。衣類・座布団・夜具地などに用いる。縞物・緋物・などがあるが、大正・昭和前半期には実用呉服として需要が高く、さまざまな緋柄が作られた。
人造絹糸／レーヨン （人絹）	天然絹糸をまねた人造の織物用繊維。綿花や木材パルプのセルロースを種々の方法で溶解し、コロイド溶液とし、これを細孔から凝固液中へ射出して繊維状に凝固させたもの。
セル	梳（そ）毛（もう）糸（し）を主とした単衣（ひとえ）着物地や袴（はかま）用の毛織物。梳毛糸に人絹を撚り合わせたもの、また経糸に絹糸・綿糸などを用いた交織毛織物もある。肌ざわりがよく、初夏に着用。セルジ。
ちりめん 縮緬 （縮面）	絹織物の一つ。経糸（たていと）に撚（よ）りのない生糸、緯（よこ）糸（いと）に強撚糊つけの生糸を用いて平織りした後にソーダを混ぜた石鹼液で数時間煮沸することによって緯の撚りが戻ろうとして布面に細かくしぼをたたせたもの。
メルトン	羅紗の一種。紡毛糸を平織または斜文組織に織り、前面に起毛したもの。洋服・外套地などに用いる。
羅紗	羊毛で地の厚く密な毛織物。室町末期頃から江戸時代を通じて南蛮船、後にオランダや中国の貿易船によって輸入され、陣羽織・火事羽織・合羽などに用いた。今は毛織物全般のことをもいう。
木綿	木綿糸（綿花をつむいだ糸）で織った織物。綿布。綿織物。

※（ ）内の表記は、『質物台帳』の表記名称です。